

朋▼名大文字▼中村旭園▼薄陽江▼八東一峰▼本能寺▼村木桜柳▼討入前後▼松崎洲陵▼大楠公▼西村旭一声▼竹生島▼小野鶴彦。

蓮水会。一水会神戸支部合同新年会。一月二十八日(日)昼一時西宮市夙川公民館。大阪小川吟水、同夫人、木庭旭山、神戸玉川緑朝、松川緑延、大隈関川昌宏、神戸三浦博の諸氏を来賓に迎え、時吟九題の外琵琶管公、高原柳水▼扇の的▼木庭旭山▼会津白虎隊▼田中珠水▼あゆ川中島▼吉田秋水▼菊水の旗▼村上湧水▼月下の陣▼関川昌宏▼淀君▼川上琵琶▼井伊大老▼稲葉卓水▼掛合巴の前▼滝沢花水、生島華水、吉山瞳水▼羽衣▼杭東詠水▼楊貴妃▼楊嶽水▼川中島▼小川吟水▼屋島回廊▼会長三浦蓮水。以上演奏後顧問松野紫雲先生寄贈の福引に興じ、又会食時には隠し芸も飛び出すなど楽しんで一刻を過ぎた。

大阪琵琶同好会の定時総会。一月二十八日(日)昼一時奈良市保養センター。五十三年度収支決算報告、五十四年度事業計画、役員改選(全役員留任)を終って演奏開始。石童丸▼安光嶺山▼川中島▼森野好子▼岩壁の母▼秋田楓葉▼菊水の旗▼米原旭智▼白虎隊▼矢野旭信▼赤垣源蔵▼朽木旭清▼本能寺▼辻旭城▼菅公▼入江旭都▼那須与市▼作花旭友▼姫ゆりの塔▼石橋旭嶺▼小栗栖▼酒井旭昭▼大楠公▼東旭子▼若き教盛▼天津八千代。以上の外詩吟舞、民謡、浪曲など。

後援会の発足を祝って。柴田旭堂さんの琵琶を愛しむ。一月三十一日(日)夕六時神戸生田神社会館、主催柴田旭堂後援会。新曲ながれ▼旭艶(宝塚スタール上原まり)、四條囀▼柴田旭堂女士

の外生田神社楽部の豊栄楽、同社獅子頭の獅子舞が披露され、ブルースピッチに続いて祝宴が開かれた。

如月会新春演奏会。二月十一日(日)正午大阪府市立北会館、主催大阪級水会の如月会。静▼広瀬登水▼石川啄木▼柏木城苑▼吉野落▼近藤登水▼茨木▼稲葉卓水▼景清▼杭東詠水▼俊寛▼中野淀▼短歌朗詠▼松原孔水▼雪晴れ▼森中志水▼(以下特別出演)掛合五條橋▼徳島内田欽水、岡本房水▼巖流島▼大阪金寄水▼掛合巴の前▼神戸生島華水、滝沢花水、吉山瞳水▼桜狩▼大阪木村蓮水▼木村重成▼同中山鳳水▼本能寺▼京都馬場鴨水▼小栗栖▼名古屋水谷浩水▼鉢の木▼大阪小川吟水▼川中島▼会長広瀬級水。

定例研究会。二月十一日(日)昼一時東京新宿州鳳会館。主催日本琵琶楽協会(千円)。富樫の涙▼石井桑水▼壇の浦▼林田旭史▼薄陽江▼鈴木鶴福▼衣川▼若林旭洋▼吹雪の敵▼前田洲月▼都落▼押川旭葉▼勿来の関▼都錦穂▼講演▼吉川英史先生。このあと懇談会。琵琶ラヂオ放送。二月八日(日)午後三時十分NHK・FM。「川中島」座間桜水、「扇の的」藤波桜華両女士。

転居。小島祉水氏 横浜市戸塚区上飯田町四六七ノ八小島有治氏方に転居。

琵琶

京

絃

第二九七号 京 絃 社

坂本龍馬碑考

高知県立図書館は、坂本龍馬の命日にちなんで、昨年十一月十五日、史料展とあわせて「龍馬と語る会」を催した。コンピュータで龍馬の音声を復活し、土佐弁で語りかける趣向は、奇技であり、企画としても面白い。広谷喜十郎・資料係長も「なにぶんにも本邦初演、永遠の青年龍馬の土佐弁再現は、画期的なところみです」と、その意欲を高く評価した。

各地の碑に失望感

名作「龍馬がゆく」の作家司馬遼太郎氏は、それゆえに名誉県民の称号をえた。高知県民の総意を反映した名譽である。いまでこそ、維新回天の立役者坂本龍馬は、多くの史劇にも登場し、国民的英雄の一人であらう。が、龍馬の名が維新史の一面に登場してくるとは明治末期から、それまでは、一剣客



因 藤 泉 石

として史実の奥底に埋もれた「いしずえ」のひとりではなかつた。家康の將軍就任から十五代、二百六十五年で徳川幕府は滅亡した。薩長軍事同盟を維新回天のひとつと見るならば、その立役者坂本龍馬は、真の革命家であらう。勝てば官軍の論理は、維新後の史実の中でも実証されていたといえる。つまり、死んだらかまわない庶民感覚の踏襲である。その証(あかし)が、各地に散在する龍馬記念碑からもうかがえ、多くの失望感を体験した。

墓さえない土佐路

拙著「拓本四国百景」(綜芸社刊)の中に、土佐の坂本龍馬が見当たらないが、なぜか。と、京都・伏見の史蹟寺田屋十四代伊助氏(本名安達清)から、こんな詰問が舞いこんだ。著者として当然予想していた質問であり、その答えは簡単であつた。

予 告

- 京都琵琶協会三月定例会 三月四日(日)午後一時本部平井会長宅。
●旭濤会演奏会 三月十一日(日)正午京都商工会議所ホール。会主梅原旭濤女士。
●入江岳秋氏追悼演奏会 三月十一日(日)昼名古屋市中須。中小企業会館、主催前田秋声氏。
●京都醍醐寺秘藏奉納琵琶大会 四月十五日(日)一時(晴雨不論)、主催大阪琵琶同好会。
●日本琵琶楽協会関西支部第二回名流会 五月六日(日)朝十時半大阪南区なんば高島屋ローム劇場(千五百円)。
●各流派琵琶合同演奏大会 五月二十七日(日)正午京都東山松原安井金比羅会館(次号詳報)

あ 例年になく暖かな冬が終つてようやく花笑ひ鳥うたうららかな春三月を迎える。冬眠から醒めた琵琶界もそろそろ各地で活発な動きが始まる。東京の柏木篤道氏が初心者向きの安撫な薩摩琵琶楽の創作に苦心され日夜研究を続けて既にある程度の成果を挙げて居られるのを知り誠に結構なことと嬉しく思う。本紙正月号年頭の辞でも熱望した通り新界後継者育成のためには先づこの道に入り易い手段方法の一つとして安撫な楽器の提供というのが大きな先決問題である。柏木氏の御苦心御熱意に対し深甚の敬意を表したい。

昭和五十四年三月一日発行(非売品) 編集者 植村真水 発行所 京 絃 社 高槻市津之江北町一ノ二番 電話 〇七二六(七三六)〇五一

土佐路には、私の取材対象にこたえるだけの龍馬碑が見当たらなかつたことである。龍馬の実像を求め、多くの碑(いしづみ)を訪ね歩いて、それが実感としてとらえることができて、よけい失望の念にかられた。なるほど、月の名所は桂浜には、昭和三年春、土佐の有志青年の浄財を集めて、建立された巨大な龍馬銅像は現存するし、近くに日公爵の龍馬をたええる碑もあつた。さらに市街地では、明治百年記念で「坂本龍馬誕生地と碑」も建っている。郊外の高岡郡橋原町宮野々の「宮野々関門旧址碑」、世にいう脱藩の碑も有様に乏しく、せめて龍馬の真筆を彫成した扇面碑ぐらゐはあるだろう、とひそかに期待していた私の状況判断は甘かつた。多くの文献、資料はもちろん、郷土史家、史談会等々の諸氏にも支援を求めたが、結局は徒労に終わったのである。土佐路には、坂本一族の墓碑こそあれ、龍馬の墓さえない。

建立者の自己満足

皮肉にいえば土佐の龍馬ではなく、日本の龍馬なのかも知れない。龍馬は、その没地の京洛にほうむられ、京都東山靈前護国神社の一隅に懐友中岡眞太郎と共に質朴な墓碑でおさまっている。ここで、墓碑建立のいきさつは割愛するが、洛南の伏見・寺田屋庭内には「贈正四位坂本龍馬君忠魂碑」「恩賜記念館」等々、大きい顕彰碑が

ならんでいて、すこぶる壯観である。しかし、いづれも巨石を築くいしづみの構えは、事大主義を旺歌する建立者らの自己満足に過ぎず、有様に乏しいのである。つまり、真の顕彰であるならば、まづ対象者の魂魄（こんぱく）を具象しなくては意味あるまい。その観点でいえば、旧来の明治調は、時代感覚としても容認されなくなった。

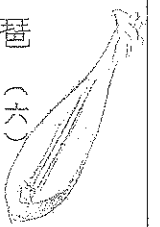
人間味ある実像を

あの幕末激動の中で、竜馬は実に多くの文献を後世にのこした。この数年、「竜馬がゆく」以降の一種の坂本竜馬ブームを契機に、酒席での酒脱な即興詩をはじめ、格調高い漢詩や優雅な和歌なども発見された。達意の書簡等々は貴重な古文書であり、人間竜馬のあたたかみとその先見性を物語る資料としてまことに感銘深い。有数の素材はある。幕末体制下の学問を修めていただけでは、竜馬の行動社会学は生まれてこないだろう。遅まきながら、寺田屋時代、在京有志らと竜馬画像碑とあわせて、有数の建碑をゆかりの寺田屋庭内に建立を進めている。

昨今の歴史ものブームで、ここ史蹟寺田屋にも若い世代の竜馬ファンが押しかけており、空白を埋めたい考えだ。芳名録の中に「高知県知事 中内力」の一筆も認められた。いづれ土佐路の有志らも、魂魄のいしづみ建立を真剣に考えるであろう。有趣あるいしづみへの提言である。

琵琶

琵琶 (六)



— 忘れられんとする音の世界 —

村山道宣

都を中心とする琵琶の流れ(下)

当道座の成立

平家物語が、鎌倉時代、初期に平曲として語り出され、多くの琵琶法師達を把えるようになったのは、十四—十五世紀の時期であった。琵琶法師達は、筑紫、明石、八坂、坂東などを主な根拠地として諸国を廻り、やがて中央に進出した有力な平曲家集団を中心に、「当道座」が形成されて行った。このようにして、地神盲僧とは別な盲人の琵琶法師の勢力が生まれて行ったのである。(この頃、九州・中国地方を本拠地としていた地神盲僧は、大和・紀州、北陸方面にも分布していたようである。)

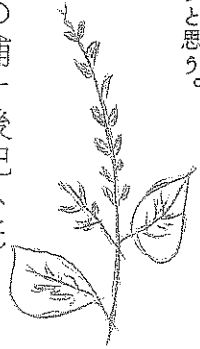
そして十四世紀後半には、平曲の大成者と云われ、またその最古の語り本である「寛一本」を残した明石寛一(一三七—一四一)が活躍する。検校の称号を得た明石寛一は、当道座の確立にも大きな役割を果たし、十四世紀末から十五世紀半ばにかけての平曲最盛期の基礎固めを成した。

当道の琵琶法師達は、光孝天皇の盲目の御子、天夜尊を祖神として祀り、また、その座中に於いては、年頭の札式を初めとして天夜尊やその母後の祭祀、守護神である山王権現、その他への社参など、数々の儀式が年中行事として行われた。中でも、二月十六日の積塔会、及び、六月十九日の涼塔会は、二季の塔とも云われ、当道座の最も重要な祭祀であった。加藤康祐氏は、「これらの儀式は、祖神や守護神への共通の信仰を媒介として仲間意識を高揚し、仲間内の積極的つながりを強化する役割を果たしていた。」(日本盲人社会史研究)と述べている。

当道座では、官位を制定し、希望者には官金を取り、その位を授け、座の得た官金収入の一部を除き座中に、位階に依り配分された。また、その官位は、検校、勾当、座頭、紫分、市名、都の六つの位階に分かれ、さらに、各位階は、細分され、全部で実に七十三に及ぶ位階があったという。当道座にあっては、このようにして琵琶法師の地位向上が計られたのであった。

平安時代から中世、近世に至るまで、下層の宗教者や芸能者達の活動は、多くの芸能や語り物文芸を生み出す原動力となっていた。琵琶法師の活動もまた、その文化の大きなうねりの中の一翼を担っていたのである。彼等の語る、語り物の背後には、時代を貫いて流れる一群の聖層の文化があった。九州にあってはそれは例外ではなかった。

中世末から近世にかけて、九州各地で様々な姿容を遂げる琵琶楽にもまた、聖層の巨大な文化のうねりが、その影を落していたのである。ここで私は話を再び九州の琵琶楽へと転じてみようと思う。



「壇の浦」後記(上)

安田元久

源平合戦の最後を彩った壇の浦の海戦に於いて、平氏は徹底的敗北をうけて、ここに平氏一族は全滅したといわれる。一一八五年(元暦二)三月のことである。確かに海戦に於いて、平家一門の重だつた人々の大部分は戦に傷つき、激しい潮流の中に身を投じて、没し去つたのである。それぞれの死が一つ一つ確認された訳ではないが、一門が族滅したという事は疑いない事実であろう。

しかしその戦いの中で、僅かながらも生き残つた人たちがあつたことも事実である。平家方の侍大将以下、軍兵の中で名も残らぬ人々の一部は、長門、豊前や豊後の地に逃れ、上陸して行方を消したのもあろう。また源氏軍に降伏して捕われた者もあつたに相違ない。これらのことが、全く史料的に残されていないだけである。

そして史実としてはつきりと証明されるものは、むしろ平家一門の重だつた人々の中での生虜者たちであった。彼等は海に投じながらも、源氏軍の武士達に助けられ、生虜の身となつたのである。その人々は、以後どのような運命をたどらなければならなかつたのであろうか。

生虜となつた主な人々は、平宗盛・清宗父子、建礼門院徳子、平時忠・時宗父子など、時忠父子は清盛との姻戚関係によつてつながるもので、広義には平氏一門といえるが、武門としての平氏一族とはいえず、云はば京都貴族の一員であり、戦の決着のついたとき降伏して捕えられるのは当然であったかも知れない。また女性の身で、しかも安徳天皇の生母たる建礼門院が、海中から救い上げられたのも致し方ない運命とみられている。

しかし、武門平氏の惣領として、一門と共に死すべき立場にあつた宗盛が、一門武將の総てが戦死した中でひとり命を永らえたのは、それが偶然の不運としても、その時代の人々、或いは鎌倉時代の武士の考えからいって、卑怯未練な行動ととられたらしい。宗盛に対する当時の人びとの批判は強かつた。

ているところを、平家の侍が海に突き落とし、宗盛は重い鎧を身につけていたが、上には、父子とも水泳に練達していたので沈むこともできず、泳いでいるところを伊勢三郎義盛の小舟に助け上げられたことになつてゐる。宗盛の優柔不断・卑怯未練という一般的評価のもととなつた説話であるが、果たしてこれが事実を伝えるものか疑わしい。

決定的敗北を自覚した宗盛ではあつても、一門の惣領として、安徳天皇以下の行方を見届ける責任があり、徒らに死を急ぐことも出来ない。そのため生への執着を示したのかも知れないし、また死ぬ気がなかつたかのように見えることもあつたであろう。この宗盛が清宗と共に死を決した時間には、その平氏軍の本營たる軍船の近くにまでも、源氏軍の舟が群れ集まつていたに相違ない。既に乱闘の時機は過ぎ、源氏軍に抵抗する平氏側の軍船も殆んど失われていたであろう。戦の最終の段階で、総ての成り行きを見届けた上で身を投げた宗盛父子が、源氏軍の舟に引き上げられる可能性は、非常に大きかつたに相違ない。簡単に卑怯未練とは断定できないものがある。

ともあれ、ここで捕虜となつた宗盛・清宗は、建礼門院や平時忠らとともに京都に送られることとなつた。土肥実平以下の百余騎に護送されて四月二十六日都にはいり、大略を引き廻されたのち、六條室町の義経邸にあつた。

朝廷では宗盛らの処分について議されていたが、結局朝議は宗盛父子の死罪を決定した。宗盛は五月三日に除名処分を受け、前内大臣の資格を失い、全く無位の囚人の立場に置かれたが、五月七日頼朝の要求によって鎌倉に送られることになった。宗盛父子を護送したのは、赫々たる戦功を挙げた義経で、義経は自分の戦功にかえて宗盛父子の助命を頼朝に懇望したと伝えられるが、既に義経に対する頼朝の疑惑心のため叶えられなかったという。



六十五年(六七)

西郷 天風

久しぶりで、上海の我が宿にくつろいだ私は翌日早速、日華子女親善協会に二神支部長を訪問し、武漢従軍慰問の話に花を咲かせていると、南京あたりの情報からみて、次は「九江」(チユ・キアン)から「廬山」方面になりそうだと、ついては、それまでの二、三ヶ月を休養かたがた帰国して、家族を安心させて来ぬか、実は、東京に届けたい物があるので頼みたいのだが、と云うのだった。

回顧すれば、天井村塾の講習会で、庄内から広島白鳥ヶ浜の海軍俱樂部に移った途端に、林銃十郎内閣瓦解が報ぜられ、塾の運動も当

然休講となって、私は台湾から上海へと、勢の波に乗って足を伸ばしつゝ、家族には連絡もとらず、程なく三年目を迎えんとしている。思えばこの帰国は当然の帰結だった。それに、頼まれた用事が参謀本部だったとは、私にとってまことに好都合だった。あれは数ヶ月前、最初に南京城内の軍指定宿舎に泊った時、初めてのことで、外出の為めの手続きが必要なもの知らぬままフラフラと衛門を出てしまひ、南京城内を見物して夕闇せまる頃、衛兵が門脇のくぐり戸に背を向けておる間に、一足踏み入れた私はそこで呼び止められ、一と悶着というきわどい経験も、今は思い出として左の文句が脳裡に浮かぶが、それも只一度食堂で見た貼紙の記憶である。

朝の点呼は 衛庭整列

夕の点呼は 各室呼名

つまり、下士官以下の宿舎ではこの鉄則が守られており、一般の従軍証も之に準ずる。しかし、参謀本部から直接下附の従軍証は左官待遇で、しかも、私に下附された従軍証はこの戦争期間中、その区域も期日も無制限という異例のものだった。

この思いもよらぬ特点是、おそらく二神氏の添書によるもので、某編輯長自らの案内にしたがい、従軍証係に申請の際の私の希望そのまゝなのも意外だった。

ところで、この内地に帰国する一週間ばかり前から、私は馴れぬペンを執って、武漢従

軍思出の記を千代田通信社発行の東京毎夕に投稿中だったので、その声価や如何にと立寄って見れば、主幹初め大いに喜び、附近の料亭に押よせては見たものの、時既に、内地では非常時下にあることを思い知らされ、なぜか、戦地に急ぐ決意をかためるに至った。折柄東京毎夕への続稿、武漢従軍思出の記も完結を見たので、取りあはず田中伯の秘書高井氏を青山の伯爵邸に訪ねれば、かつて水戸在任時代に模写した常磐神社の宝物、藤田東湖像の水墨画が、田中光顕伯の讚によって立派な軸となり、多摩明治記念館の田中伯宝物室に納められし折とあって、十一月三日の国際日を卜し、明治記念館玄関口、明治大帝御馬上の御銅像前に於て、「錦の御旗」の演奏を奉納し、三度上海に戻り、蘇州の野戦病院前に立ったのが十一月の初旬だったろう。此処は今迄とちがって中々整った病院で、野戦病院とは思われぬほど総てが完備されていた。部隊長である軍医殿も以前とはちがって、茶話の合間に、いくつかの俳句に解説をつけて示されるなど、心のゆとりがうかがわれるのであった。

この日、私に一人の相棒が現われ、患者はもとより、病院内は活気が充ちていた。それは、高野天山と号する一時講師を夢に各地放浪の経験者で、第一次世界大戦の傷痍軍人が、人間社会の裡表を面白おかしく話し、琵琶に色香を添えようと云うのであった。この「コンビ」案外好評を博し、蘇州を皮

切り前線に近いあたり数ヶ所をトラックで廻り、やがて、北支に近いパンブの奥徐州に名高いザクロの産地で土産の用意をした頃、高野天山氏の都合で別行を取ることになった。この高野氏は、九州のさる田舎町駅前旅館を営む、片足の愉快な軍人だった。

芥川の鬼(下)

宇津木 秀 甫



「芥木の鬼」は芥木村の百姓の家に鬼子が入りまわって、その子を百姓が山へ捨てに行ったら、その子は大江山へ行って酒呑童子(しゅてんどうじ)の家来になったという説話でした。つまり「捨て子説話」なのです。

大江山の鬼の大将は酒呑童子と呼ぶわけですが、これは後の呼称で、始めは「捨て童子」だったといわれています。

年の頃は四十を過ぎていたのに童顔で、髪のかたちは長髪、つまり子供の髪のかたちだったという風に酒呑童子は書かれています。捨て子が多かった時代に、世の人々に捨てられた児どもたちが復讐してこないかとおびえたわけで、そこから酒呑童子の一味が物語りとして形成されて行ったのです。

鬼というものは復讐してくる恐ろしいもの

であつたそりです。

芥川に鬼が出たという説話を今度は紹介したのですが、芥川は古代の山陽道が開発された時よりの宿駅です。陸路で京のみやこから難波に行くには山陽道(今の西国街道)を芥川まで来て、芥川から柱本、江口を通って行ったといわれています。交通の要地として自然に人々が集り、市が形成され、そこには捨て子もうるついていたと考えることも出来ます。

ところで、今回紹介した「芥川の鬼」は、「伊勢物語」の六段目にもとづいていることは云うまでもありません。「伊勢物語絵巻」などでは、竹藪のある山崎街道を、姫を背負って歩く公卿の姿が描かれています。業平が創った説話ということになりますが、純然たる個人の創作説話だとは思われません。

「白玉か何か」との和歌は、大阪の「長柄の人柱」の説話にも「白玉か露かと人の問ふものは消えかえりゆくわが涙かな」という歌がはいっていて、読者知らずのよく知られた歌の焼き直しです。「伊勢物語」が「長柄の人柱」説話より前だという人もありそうですが、私は逆だと考えています。

岩波の「伊勢物語」(古典文学全集)では、京の御所近くの川のほとりで姫盗人が捕えられた事実があつて、それをもとに説話ができただろうと解説されています。説話の前半はそうでしょうが、後半の鬼にたべられてしまったところは、むしろそういう鬼がいると芥

川では噂されていたからでしょう。業平と親交のあつた伊勢姫の住まいが高槻にあつたのですから、業平が土地の伝承にもとづいて説話をまとめたと考えべきです。

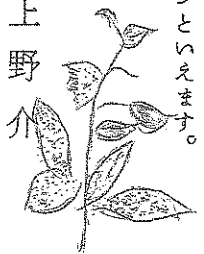
ひと口でバクツとたべてしまふ鬼を一口鬼と呼びます。一口鬼は古代の一言主(ひとことぬし)、一言神(ひとことがみ)にもとづいて発想されているようです。

古代のことですが、天皇が葛城山に行幸したところ、天皇と同じ姿をして山の上に立っている者がいる。天皇が怒って「誰か」と尋ねると「一言主」と答えて姿を消したという説話があります。天皇と同等の権力者であつたのが、被支配の立場に移されたのであつて一言で託宣をする神人だったのです。

芥川の古代に、一言で託宣をする神人がいて、その復讐の魂が伝わっていた、などと考えるのもロマンといえます。

吉良上野介

悪役人は汚名 素顔は律義!



大阪府下の旧家に「赤穂浪士の敵役吉良上野介義央」の自筆の札状が秘蔵されている。映画や琵琶歌などでは、上野介は汚職役人の代表として悪人になっているが、贈り物への

礼を述べた文面から見ると、律義なところのある人物とも想像される。

上野介の書状があったのは、大阪府南河内郡狭山町、榎原考古学研究所長末永雅雄さん宅。同家は南河内の旧家。先祖の誰かが入手したのではないかといい、長い間倉庫の中に眠っていた。

書状は二通あり、何れも下間少進(しもつま・しようしん)宛て。奉書紙を二つ折りにして書かれている。仲々の達筆で、文章も丁寧である。

一通は、端午の祝いに下間少進が帷子(かたひら)五着を上野介を通じ將軍へ贈ったことへの礼状。「老中に披露したところ、みんな喜んだ」とある。またこのあとに「私にも時服代として銀子二枚をお送り下さり、毎度のことながら御念のいたたことで。」という意味の文が続いている。

將軍へ祝儀を贈った際には、上野介に銀子三枚(約三両)程度を度々贈っていたらしい。

書状を出した下間少進の「少進」は官職名で、年代が入っていないため具体的に誰かはわからない。歴史上有名な下間少進は、西本願寺の坊官(寺役人)で、能役者としても知られる。しかし、この少進は元和二年(一六一六)に死亡しているため、上野介が贈り物を貰った人物とは時代が合わない。恐らく子孫が「下間少進家」を名乗り、贈り物をしたのではなからうか。

近世文書に詳しい京都市史編さん所の森谷尅久氏は「銀子三枚は、当時では汚職といわれるような大金ではない。それでも、これだけ丁寧な礼状を書いているのは、京都では彼が礼儀正しい男として通っていたことを裏付けるものでしょう。上野介自筆の文書はあまり多くなく、その点でも貴重だ」という。

(朝日新聞から転載)



イラク国音楽祭に琵琶参加の旅日記

矢吹 旭美津

去る昭和五十三年十二月一七日、イラク共和国文化芸術省主催の第二回バグダット国際音楽連盟及び「ud」祭に「日本の琵琶演奏者」として日本大使館から私達が招待され、十一月二十九日午後八時五十分日航四七五便で成田空港を出発しました。一行は筑前琵琶橋会館範矢吹旭美津、田中勝水、藤井智昭氏(名古屋大学教授、平家琵琶保存会々長)並びに東京の若杉カメランの四名で、バングラ、ボンベ、カラチ、アブダビを経て、翌日正午過ぎイラクのバグダット空港に着、空港にはイラク国政府要人二人と日本大使館の勝瑞係官が迎えて下さり、車でバグダット市の中心にある国立バグダットホテルに案内

されましたが、こんな長い空の旅ははじめてで、未知の国や外国人音楽家の方々に逢う喜びで胸いっぱいになり旅装を解きました。ホテルには既に到着の外人さんたちの顔も見え、また先年来日のud演奏者手ムニール・バジャール氏も来訪され、私達も再会を喜び握手して旧交を温めました。翌日は一日休養日との事で、第二日は午前十時からバスで会場に案内されましたが、今回の参加は三十七ヶ国で、流石に色々容姿の異なった人達の集まりです。会場は立派で開会式に続いて順次自国の音楽に関する講演をされます。まづ、中世時代のヨーロッパにアラビアのイスラム音楽成長の大役目を果たした彼の有名楽器udをはじめ、リュート、ギター、マンドリン、バラライカ、支那琵琶、それに日本の琵琶であります。管絃樂に加えて観念学分析原理の比較についての講演や討論等が交わされ、藤井先生も約二十分に亘り講演されました。会議は毎日午前中行われ、午後は市内見物や名所旧蹟の見学、夜は七時から毎夜一、二ヶ国の人の演奏会が国立劇場で開かれます。会場の中は円型になっていて、正面には立派な舞台があり、客席は来賓席と一般席に区別されています。

私達の琵琶演奏は第三日目で、赤々とした照明下、テレビ局の録画取りなど、前宣伝が良かったのか続々と聴客が詰めかけて熱気が溢れましたが、一般市民には公開されず関係

者と政府の招待者だけということで、日本の伊達大使御夫妻も館員同伴で来場されています。

演奏曲は、①弁財天、②楽器のみの連弾、③大納公の順演で万雷の拍手が鳴りやまず、アンコールに応じて「千代の寿」を熱演して大いに筑前琵琶の面目を施しました。

日本の琵琶というものを始めて聞かれたイスの人は、大変琵琶が好きになったから、機会があればスイスで皆に聴かせて欲しいと云って下さいました。

演奏会終了のあとバジャール氏のお宅に招かれて、奥様お心づくしの豪華な御馳走を頂きながら、大の日本好きのバジャールさんと夜の更けるのも忘れて語り合いました。

各国の演奏を聴かせて貰った中で、私達はベトナムの三絃琵琶が、歌も絃音も深く印象づけられました。また、イラク国でも演奏会終了後大宴会が催され、珍しい初めてのお料理に驚きました。なお、一日を割いて日本大使館附属小学校へ慰問に行き、可愛い子供達が一生懸命に私の演奏を聴いてくれたあつぷらな目つきが今でも目に浮かびます。

帰途タイ国のバンコクで五日間見物、十五日夕七時大阪空港に帰着して前後十六日間の旅行を無事終りました。



日本芸術琵琶普及会一月例会

一月十四日(日)昼一時東京文京区大塚の貸席京屋で開催。お江戸日本橋・門琵琶・伴流第六弾法一錦幽上海別れの歌一内田隆章、川北知妃佐、磯田旭竜春の調べ一坂入俊風、鉢の木一青木早水、戦艦大和一伊与田詩水、利久の最期一山崎錦幽、安宅の関一若宮旭登、須磨の春一高田栄水、城山一杉山旗水、ひまわり草一磯田旭竜。以上演奏のあと新年宴に移り楽しい一刻を過ごして七時散会した。

名古屋秋季声楽の新年会

一月十五日(日)昼一時名古屋中小企業福祉会館(会員)小沢、兵頭、鬼頭、山本、山田、福島、長谷川、松浦、阿部(松浦会員)、後藤定、後藤とめ、稲垣、田端、川島、水野、近藤(来賓)彦根西川磯水、名古屋奥村慧水、同谷津壮水、同石川旭豊、岡崎伊藤皇水、東京前田秋声。以上出席一曲宛演奏のあと新年宴に移り七時なごやかに解散した。

京都琵琶協会の新年宴会・月例会

①一月二十一日(日)昼一時本部平井会長宅。馬場鴨水、戸倉旭嶺、楊嶽水、梅原旭濤、安住旭康、矢吹旭美津、山岡旭清、牧南水、荒木旭媛、桜井旭富、木下皇水、峰口高昇、水内媿水、平井春嶺、植村寛水、以上十五氏出席して総会開始。牧会計理事の五十三年度会計報告、平井会長の五十四年度事業案をそれぞれ承認のあと各会員から有意義な意見の開

琵琶名流大会

一月二十六日(金)正午東京銀座座ガスホール、東京新聞・日本琵琶協会の共催(千五百円)。五条橋一三箇万里子、曲垣平九郎、都穂苑、壇の浦一藤内旭須美、八甲田山一座間燦水、粟津の露一山下旭瑞、城山一須田誠舟、湯島の白梅一長谷川錦舟、壇の浦秘曲一押川旭葉、彰義隊一古家絃風、田村邸名残の花一大野皎月、富樫の涙一石井桑水、経正一広瀬圭穂、羽衣一水藤五郎、木原綾子、小絃藤巻旭彰、(立方二、等一入)北條政子、伊集院牙城、勧進帳一小沢錦弥、加茂の宵月一小原旭成、鉢の木一遠藤鶴東、湖水乗切一石坂鶴